

萬福寺に寄進された「磨墨塚」について

前号の続き

萬福寺住職 安本 利正

前号に磨墨塚を書いたら、それを読んだ神奈川県小田原の方から、小田原市の北方の南足柄市生駒にも磨墨塚があると、地図を書いて教えて下さいました。早速、南足柄市へ問い合わせると、すぐにご回答をいただきました。その場所は塚ではなく、足形社と称する神社でした。相模国風土記(今から一七三三年前の記録)には、「源頼朝秘蔵の磨墨の産せし地なれば村名とす」「彼馬は毛色純黒にして大形の馬で磨墨と名付けり、村名も頼朝が名付ける所と伝える」「足形社は駒形権現とも呼べり」とあり、その地の付近には駒形新宿、生駒山の地名や駒千代橋の橋名があって、生駒の伝説が人々に愛されてきたことが知られます。

梶原家と馬込の最初の関係

源頼朝は治承四年(一一八〇年)、箱根合戦に敗れて舟で房州(千葉県)へ逃れた。房州の平広常はその地(夷隅郡硯村)で生まれた名馬を頼朝に献上した。頼朝は馬名を磨墨と名付けて愛育し、池月、若白毛と共に三名馬として秘蔵した。献上された時に馬齢は三、四歳とすれば、宇治川先陣争い(一一八四年)は、その四年後であるから、馬齢は七、八歳になっていたと思われる。馬の寿命は約十五年前後と言われているので、最盛期であったであろう。梶原一族が静岡で滅

亡した正治二年(一二〇〇年)には馬齢二十歳を越えているので、初代磨墨はすでに死亡し、二代目の磨墨が奮戦活躍したのでであろう。

梶原一族は正治二年(一二〇〇年)に滅亡したが、女房子供は実家へ戻って生育され、約二十年後に息子たちは成人している。梶原景季の長男景望は承久三年(一二二一年)に大井村に領地を拝領した。その三男景氏は建長年中(一二四九―一二五六年)、馬込村に先祖の墓と阿弥陀堂を建立した。これが梶原景氏と馬込村との関係の最初である。この両者の間には何か特別な関係があったのだろうか。元応二年(一二三〇年)に大井萬福寺は火災で焼失し、六代梶原景嗣は寺を馬込村の阿弥陀堂へ移し、大井の梶原屋敷を馬込村へ移している。これも馬込の住人たちが昵懇の間柄であったから実現したことだろう。現存する南馬込の磨墨塚は三代景氏以後に造られたと考えられる。特に六代景嗣は屋敷を馬込に移しているので、塚を造る可能性は最も濃厚であろう。

初代磨墨はどこに葬られたか

ここで話題を最初に戻して、初代磨墨が馬齢十五歳前後で死亡したとすると、当時の梶原屋敷は浄妙寺(神奈川県鎌倉市)の東側であり、初代磨墨の墓はその近辺であろう。正治二年(一二〇〇年)に静岡で奮戦した磨墨は二代目か三代目であり、馬齢も最盛期の駿馬であったと考えられる。その磨墨は景時山で景時が敗死の時に共に勢力尽きて死亡したと伝えられ、その後村人たちによって祀られたと伝えられている。

馬込の伝説の中に磨墨は逃げてきて馬込を回って駒落谷で死んだ、との話があるが、静岡で死亡しており、来ることはなかった。これは後世になって馬込村の人たちの願望であったのでありましょう。大井梶原氏も代々にわたって先祖の遺徳を偲び、名馬を求むる時に黒毛の馬があれば、求めて磨墨と名付けて愛育したのである。それが死ぬと埋葬して塚を磨墨塚と名付けたでしょう。磨墨の名は有名であるから馬の愛好者は黒毛の馬を求めれば磨墨と名付けたであろう。全国に磨墨の生誕地が多数存在するのは襲名されたので、多くの磨墨が存在したのである。今回調べて十一カ所の生誕地が見つかった。前記の南足柄の生駒も、その幾代目かが生まれた場所であろう。全国に磨墨塚を調べてみると六カ所発見した。もっと数が多く存在するのであろうが、後考にまかせたい。梶原氏の分家は全国に散在するので、中には先祖景時公を偲んで馬名を磨墨と名付けたであろう。後代になる程、伝承は有名になり、特に江戸時代になると芝居芸能となって愛好者が増加している。

現在の南馬込の磨墨塚(写真)

- ① 塚の中央に明治三十三年(一九〇〇年)八月に建てた大形の板石に磨墨塚と刻み、三十六名の姓名を刻んでいる。
- ② 左の細長い小碑に「午の方あぶみが谷、子の方駒落が谷、正治二年(一二〇〇年)二月十七日埋塚せりと云」の文字を刻む。午は南方を、子は北方を示している。
- ③ 右に享保五年(一七二〇年)十一月建立の庚申塔があり、十人の名を刻んでいる。



④ 右奥下(塚の反対側)の角石柱に馬頭観世音大正五年(一九一六年)十月十三日金子直次郎建之と刻む。

古くは「磨墨塚、安倍猪左衛門尉家久建之」と刻んだ丸形の石があったが、石積の中に埋もれて今は見られない――と伝えられている。

安倍猪左衛門と称する人は慶長十一年(一六〇六年)に梶原家の墓石を建てた人で、今から四〇九年前の人であり、それ以前に磨墨塚に石碑を建てない時代があったとすれば、更に二、三百年前から存在していたとも想像されます。ただし、景時、景季の磨墨ではないことは明白です。後世に造られた塚です。

以上、磨墨塚について調べてみると、南馬込の磨墨塚は特別に有名であって、多くの書籍に引用されて最も有名な存在です。